

# 最近、先に結論を書くと 言われ続けているので

川越敬志 — 編集者

『項羽と劉邦』 司馬遼太郎



この本は項羽と劉邦が中国大陸の統一を目指して延々と戦うことを微細に綴った戦記小説です。最後の最後に劉邦が勝ち、項羽は無残に死にます。WEBにアップする文章は結論から先に書け、とよく言われるので、巷で流行っている金言に従いました。

私は作品が著者や読者の人生に寄り添おうとしてくるのをかなりうざいと思うタイプです。とくにウジウジした私小説は大嫌い。小説は読んで面白ければ、それでいいじゃありませんか。読書の傾向は人それぞれ。爺だって高校生だって、好きなものを好きなように読めばいいんです。

本書ではふたりの英雄のうち劉邦のキャラの方が明らかによく描けています。劉邦にはその統領らしい昇龍の如き風貌以外、取り柄らしい取り柄は何もありません。そして統率する人間の数が星の数くらい膨張するほど力を発揮できるという特殊能力の持ち主です。

「偉大なる空洞」という東洋的なリーダー論をこの本から読み取るのもカラスの勝手ですが（ちと古いな）、私も劉邦みたいな親分の下で自在に働く方が得手であると思います。このあたり、私自身がすでに劉邦の術中にハマっているのかもしれないね。

司馬遼太郎を書棚に置いておこなんで、政治家や中小企業のオヤジみたいでカッコ悪いと思うでしょうし、実際カッコ悪いですが、歴史嫌いの人も取り込む魅力を本編は持っています。国語が苦手な高校生も、本書を読んで、「四面楚歌」の語源くらいは覚えておきましょう。入試に役立つよ、たぶん。

案内人・川越敬志さんが『項羽と劉邦』を勧めるもうひとつの理由

若いうちに本を読んでおかないとバカになる。なんてその昔は言われたものですが、そんなバカな話はありません。ただし、バカようになって本を貪り読むクセ、長い書物を読んでいる時のぐだぐだの醜態感を知らずに育ってしまうと、つままない大人になってしまう可能性があります。昨今、バカと言われるよりも、つままない奴と思われる方が堪えるでしょ。そういう意味でも、上・中・下、文庫3巻の『項羽と劉邦』は必要にして十分なボリューム。読み始めれば、項羽が死ぬまで、アっという間。ホント、瞬殺。🗨